

■ 概況

当週（9月18日～25日）の国際石油市場は、OPECプラスの増産方針、米国景気への懸念等による需給緩和感とウクライナやパレスチナの戦闘激化による緊張激化と供給懸念が交錯、拮抗し、前半低下の後、後半で上昇、週間で見るとわずかに上昇した。

国際エネルギー機関(IEA)月報の来年に向けて需給緩和と拡大の予想で始まったが、ウクライナによるロシア本土石油施設へのドローン攻撃、また、米国の対露経済制裁強化の姿勢で、緊張が激化し、原油価格は上昇、強含みの展開であった。

NYのWTI原油先物市場は、60ドル前半の水準で推移したが、わずかに上昇した。9月18日は続落の63.57ドルで始まり、週明け22日まで4営業日続落で62.64ドルに下落したが、23日は反発、24日は続伸で64.99ドルに回復した。

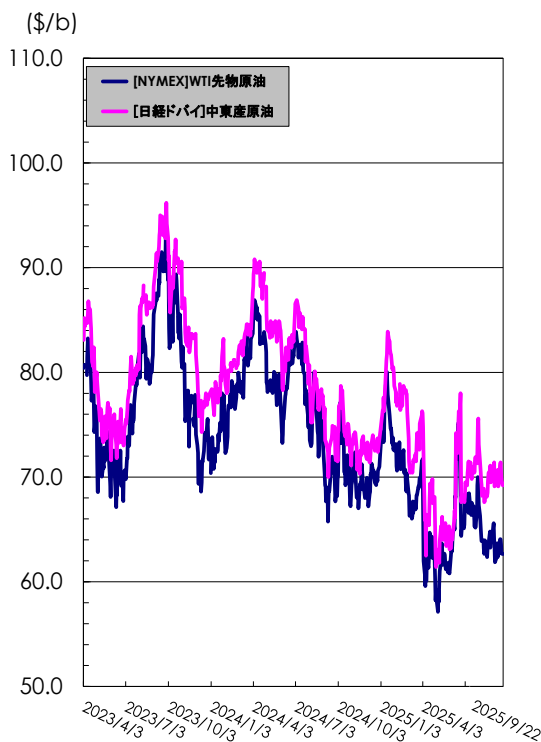
また、中東産バイ原油/東京市場(11月渡し)も、前週(9月11日～17日)は69.10～71.40ドルの範囲で推移したが、当週は、9月18日70.40ドル、19日69.70ドル、22日69.20ド

ル、24日71.40ドルだった。

対ドル為替レート(TTM)は、前週(9月11日～17日)146.55～147.56円の範囲で推移したが、当週は、9月18日146.98円、19日148.05円、22日148.29円、24日147.85円だった。

そのような中で、9月22日時点の国内製品小売価格は、ガソリンが前週比0.1円高、軽油も同0.1円高、灯油は同3円高(18リットルベース)だった。ガソリンの全国平均価格は175.3円だった。9月25日～10月1日の燃料油補助金の支給額は、「予防的な激変緩和措置」が廃止されているため、定額分のみ、ガソリン・軽油は10.0円、灯油・重油の場合は5.0円となった。

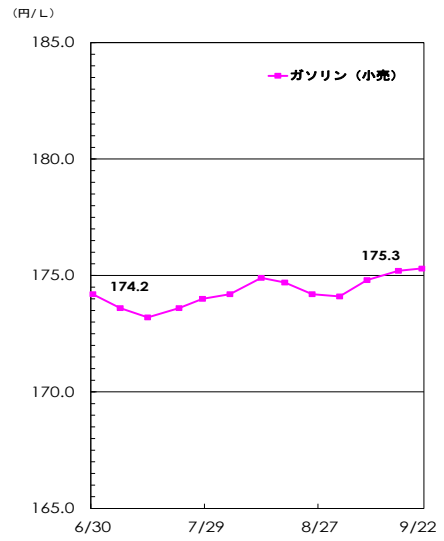
原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	9/14 ~ 9/20	2,537 ▼ -40	▼ -
	トッパー稼働率 (%)	"	73.3 ▼ -1.2	▼ -
	原油在庫量 (千kl)	9/20	11,176 ▲ 478	▼ -
価格	中東産原油(日経ドバイ) (\$/bbl)	9/23	69.20 ▼ -1.90	▼ -5.4
	WTI先物原油(NYMEX) (\$/bbl)	9/22	62.64 ▼ -0.66	▼ -7.7
	原油CIF単価 (\$/bbl)	8月下旬	72.03 ▲ 0.04	▼ -15.05
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	66,846 ▼ -316	▼ -15,863
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	147.54 ▲ 0.78	▲ 3.46
	外国為替TTSレート (¥/\$)	9/23	149.29 ▼ -0.76	▼ -4.55



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週		前週比	前年比
需給	在庫	9/20	1,629	▼ -63	▲ -
価格	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾) 9/16 ~ 9/23	81.0	➡ 0.0	➡ 0.0
		(TOCOM/中部) 9/22	86.0	▲ 5.0	▲ 5.0
	小売 [週動向]	(資工庁公表) 9/22	175.3	▲ 0.1	▲ 0.6

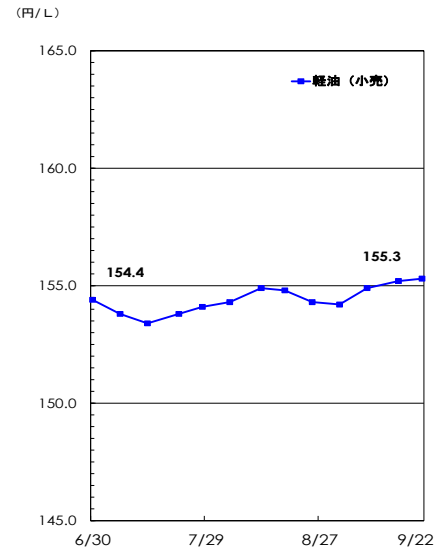
※先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

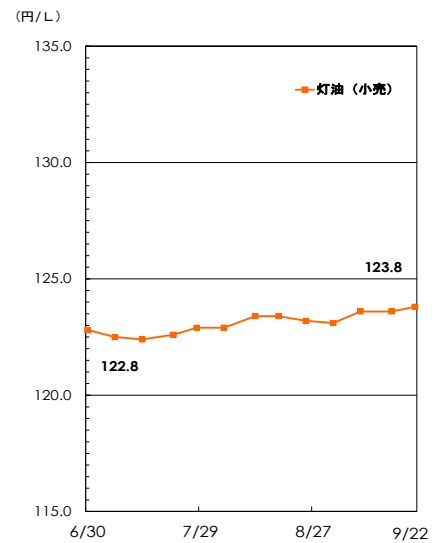
軽油		今週		前週比	前年比
需給	在庫	9/20	1,612	▼ -30	▲ -
価格	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾) 9/16 ~ 9/23	83.4	▼ -0.3	▲ 1.2
		(TOCOM/中部) 9/22	-	-	-
	小売 [週動向]	(資工庁公表) 9/22	155.3	▲ 0.1	▲ 1.0

※先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週		前週比	前年比
需給	在庫	9/20	2,675	▼ -18	▲ -
価格	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾) 9/16 ~ 9/23	85.0	➡ 0.0	▲ 4.7
		(TOCOM/中部) 9/22	82.0	➡ 0.0	▲ 1.5
	小売 [週動向]	(資工庁公表) 9/22	123.8	▲ 0.2	▲ 6.7



■ 関連情報

1 海外/原油（WTI原油先物市場）

前週（9月11日～17日）のNYMEX・WTI先物市場は、62.37～64.52ドルの範囲で推移した。

当週9月18日は、米国の連邦準備制度理事会（FRB）の公開市場委員会（FOMC）が9か月ぶりに0.25%の利下げを決定したが、経済拡大に伴う消費拡大期待の一方、織り込み済みとの見方、経済効果への疑問もあり、影響は限られた。ただ、クウェートのルーミー石油相は、米国の利下げはアジア市場を中心に石油需要を増加させることになると発言した。しかし、この日発表の民間調査会社の先行き景気指数が先月を下回り、景気後退感が出たこと、ドル高進行で先物原油の割高感が出たことから、続落した。10月物終値は前日比0.48ドル安の63.57ドル。

週末19日は、前週からの米国の石油消費の停滞懸念、OPECプラスの増産姿勢を背景に、ポジション調整の売りもあり、3日続落した。ただ、米国・欧州連合（EU）の対露経済制裁強化の動きもあり、下値は限られた。10月物終値は前日比0.89ドル高の62.68ドル。

週明け22日は、前日のイラク石油販売公社（SOMO）による、OPECプラスの増産合意を受け原油輸出量を増加させたとの発表があり、わずかながら、4営業日続落した。ただ、エ

ストニアからは、ロシア軍機による領空侵犯の発表があり、英仏等のパレスチナ国家承認が続いたものの、イスラエルのガザ攻撃が激化するなど、地政学リスクの高まりも見られ、下値は固かった。10月物終値は前週末比0.04ドル安の62.64ドル

23日は、依然として、OPECプラスの増産決定等需給緩和感が根強い中、イラクとクルド自治政府が合意していた、北部イラク原油の2023年3月以来の輸出（約23万BD）再開が頓挫したとの報道で、買いが強まり、反発した。また、前日までの安値の買い戻し、あるいは、欧州連合（EU）による対ロシア産原油制裁強化に対する警戒感も高値の背景となった。この日から、新たな中心限月に繰り上がった11月物終値は1.13ドル高の63.41ドル。

24日は、米国の先週の原油・石油製品在庫の取り崩しが報告され、石油需給緩和感は後退、また、この日、トランプ大統領は、ウクライナのゼレンスキー大統領と会談、直後のSNSでは、従来姿勢を一変、ウクライナは全土回復が可能との考え方を示し、対露制裁強化方針を印象付け、石油需給の緊迫感を高めたことで、続伸した。11月物終値は1.58ドル

2 海外/米国石油市場

米国エネルギー情報局（EIA）、9月24日発表の19日現在の米国在庫週報は、原油在庫が前週比60万バレル減（市場予想：110万バレル減）、ガソリン在庫も110万バレル減（市場予想：30万バレル減）、中間留分在庫は170万バレル減（市場予想：150万バレル減）と、原油・製品ともに市場予想並みの取り崩しとなり、需給緩和懸念を後退させた。

EIAによると、9月22日時点で、ガソリンの小売価格は、前週比0.5セント高の1ガロン3.173ドル（125.2円/ℓ）と2週ぶりの値上がりで、ディーゼル小売価格も、前週比1.0セント値下りの1ガロン3.749ドル（148.0円/ℓ）と2週ぶりの値上がり。

ベーカーヒューズ社によると、9月19日時点で、米国内の

稼働陸上石油掘削装置は、前週比2基増の418基となった。

3 国内/原油処理量

石連週報によれば、2025年09月14日～09月20日に休止したトッパー能力は35.4万バレル/日で、前週に対して0.0万バレル/日の横ばい（全処理能力は311.0万バレル/日）。

原油処理量は253.7万klと、前週に比べ4.0万kl減少。前年に対しては7.3万klの減少。トッパー稼働率は73.3%と前週に対して1.2ポイントの減少、前年に対しては2.1ポイントの減少となった。

4 国内/製品在庫量

9月20日時点の在庫は、前週に対してガソリン、灯油、軽油、C重油は取り崩し、ジェット、A重油は積み増しとなった。

ガソリンは162.9万kl、前週差6.2万kl減。前年に対しては4.8万kl多い。

灯油は267.5万kl、前週差1.8万kl減。前年に対しては38.2万kl多い。

軽油は161.2万kl、前週差3.0万kl減。前年に対しては16.6万kl多い。

A重油は80.4万kl、前週差0.6万kl増。前年に対しては11.3万kl多い。

C重油は158.7万kl、前週差11.7万kl減。前年に対しては6万kl少ない。

(単位：千KL)

	今週 (9/20)	前週 (9/13)	前週比
ガソリン	1,629	1,692	▼ -63 (-4%)
ジェット燃料	950	935	▲ 15 (2%)
灯油	2,675	2,693	▼ -18 (-1%)
軽油	1,612	1,642	▼ -30 (-2%)
A重油	804	797	▲ 7 (1%)
C重油	1,587	1,704	▼ -117 (-7%)
合 計	9,257	9,463	▼ -206 (-2.2%)

5 国内/元売会社製品卸価格

9月16日～22日のドル建て中東原油価格は前週比わずかに値上がりしたが、元売会社の卸建値はわずかに値下がりしたものと見られる。また、9月4日以降、補助金は、定額10円(揮発油・軽油の場合。灯油・重油は5円)と据え置かれていることから、補助金込みの実質卸価格は、わずかに値下がりとなった模様。

6 国内/製品小売価格

9月22日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週比0.1円高の175.3円、軽油も同0.1円高の155.3円、灯油は18 $\frac{1}{2}$ ¢ベースで同3円高の2,228円(1 $\frac{1}{2}$ ¢ベースでも同0.2円高の123.8円)。ガソリンは3週連続の値上がり、軽油も3週連続の値上がり、灯油は2週ぶりの値上がりだった。ガソリンについて、都道府県別には、値上がりが23都府県、横ばいは4県、値下がり20道府県だった。全国最安値は愛知県の169.9円、その次は埼玉県170.1円であった。他方、最高値は鹿児島県の185.5円。最も値上がりしたのは沖縄県(前週比0.9円高)、最も値下がりしたのは兵庫県(同0.7円安)だった。

次回調査時(9/29)のガソリンの小売価格は、小幅な値動きが予想される。

(単位：円/ℓ)

(資工庁公表) [週動向]	今週 (9/22)	前週 (9/16)	前週比	直近高値
レギュラー	175.3	175.2	▲ 0.1	2023/9/4 2025/4/14
灯油	123.8	123.6	▲ 0.2	08/8/11
軽油	155.3	155.2	▲ 0.1	08/8/4

小売価格

※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2004年6月以降の最高値。

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.iej.or.jp>) に掲載しています。
次回(2025第26号)の公表は、10/3(金) 14:00 です。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターへドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

当センターでは、平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告を受けて、石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力のもと、石油関係者、企業の経営者の方々から一般消費者の方々まで、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

②【原油価格】〈WTI先物原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、日本経済新聞掲載の東京スポット市場(取引の中心限月)の午後の中値を採用。※一般に、中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格が指標とされる。

為替換算レートとして、三菱UFJ銀行発表TTM

(Telegraphic Transfer Middle rate : 中値)を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

④【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000 SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁HPに掲載)。